

私の中の熱を殺さないで_____

中谷 夢 (なかたに ゆめ)

私が好きなものは自分で決める。
そのために努力を惜しまず頑張ってきたんだから……。

でも、時と場合は選ぶべきだったのかもしれない。

「なあ、夢の兄ちゃんにサイン貰ってくれよ。何か知らないけど有名人なんだろう？」

小学6年生の時、クラスメイトの男子に言われた一言。

私の人生の中で教室の中でしか出会うことのないモブキャラに嫌悪感を覚える。

「聞いてんのか？昨日テレビ出てたんだろ？なんだっけ、ぶらっくらいとってバンドの…。」

「うるさいな。私はそんな人知らないし、もし知っててもあんたみたいなデリカシーのないやつのためにサインを貰ったりしないよ。」

相手の声を遮るようにそう言って、教室を抜け出した。お兄ちゃんのことを何も知らないくせに、テレビに出ていた有名人ってだけで興味を示してきた男子がただただうざかった。

8個年の離れたお兄ちゃんは『BLACK LIGHT(ブラックライト)』というバンドのドラムを担当しているジュンジロウ。私が物心ついた頃には家にドラムセットがあり、お兄ちゃんはずっとそのドラムをたたいていた。

膝にのせてドラムの叩き方を教えてくれることもあったけど、私はお兄ちゃんが叩いている姿を見るのが好きで、何回か教えてもらったところで断った。

小さいころからお兄ちゃんの後姿を見て、ずっと憧れてきた。お兄ちゃんの真似してドラムを始めたし、アマチュアの頃からお兄ちゃんのライブにも毎回足を運んでいる。

そして2年前にプロになったお兄ちゃんが家を出していくタイミングでドラムセットを置いていった。事務所が新しいものを用意してくれるので、運ぶには大きすぎるかららしい。

お兄ちゃんが家を出していくから、私はお兄ちゃんのドラムセットに触るようになった。右手も左手も足も別のリズムを刻んだり、音の強弱をつけたり、分からぬなりに身体で覚える。

もっとお兄ちゃんにいろいろ教えてもらったらよかったなと思いながらも、いつかお兄ちゃんみたいにドラムが叩けるようにならいいなと思っていた。

そんな最中でお兄ちゃんがテレビに出た。もちろん最高にかっこよくて、身内じゃなくても惚れてしまうんじゃないかという演奏にせっかく浸っていたところから、冒頭の話につながる。お兄ちゃんの話を学校でも友達にもしたことはない。いったいどこからあいつは話を聞きつけたのだろうか？

話の出どころも気になるところだが、そんなことよりもお兄ちゃんの存在が軽んじられていることに対する怒りは冷めそうにもなくて、そのまま誰もいなさそうな音楽室へと向かった。何か音楽でも聴いたら少しは心が落ち着く気がしたからだ。

音楽室に入ったが予測通り誰もいない。

黒板近くの段差になっているところに腰をかけると、ポケットから音楽プレイヤーを取り出す。これもお兄ちゃんのおさがりで、没になって発表していない曲まで中に入れてくれている。本当はダメなんだろうけど、誰にも聞かせないという約束で入れてくれた。

いつもは学校に持てこないんだけど、今日は昨日のこともあって浮かれて持ってきていた。いつでもお兄ちゃんの曲が聞けるようにと。

イヤホンを耳に入れると、『BLACK LIGHT(ブラックライト)』のアルバムをランダムで再生する。周りの音が聞こえてこないくらいまで音量を上げると目を閉じて曲の世界に浸った。

2曲くらい聞き終わったタイミングで目を開けると、すぐ近くにクラスメイトの浜田 清太（はまだ きよた）がいて私のことを見ていた。

とっさにイヤホンを外すと音楽を切ってポケットに突っ込む。バレたらまずい。これが先生にバレたら没収される可能性もあるし、そうしたら聞かせちゃダメな曲を先生に聞かれてしまう可能性がある。

「慌てて隠してももう遅いよ。聞いてるところ見ちゃったし、音も漏れてたから『BLACK LIGHT(ブラックライト)』の曲聞いてるの分かったよ。」

のんきにそう言った清太は私の隣に座った。

「おねがい。絶対に先生に言わないで。これお兄ちゃんからもらった命よりも大切なものの。」

必死にそう言ったものの清太は表情を変えることなく「言わないよ。」と言った。

「むしろ謝りたくて後を追ってきたのに、意地悪なんてしないよ。ごめんね、僕のせいで嫌な思いさせちゃって。」

間延びしたしゃべり方で清太は私にそう言った。何の話をしているのか一瞬本当にわからなくてきょとんとしていると、清太は話をつづけた。

「僕ね、『BLACK LIGHT(ブラックライト)』のファンなんだ。ドラムのジュンジロウさんが上手いで有名だけど、僕はベースのヤマトに憧れているんだ。いつもは優しそうな雰囲気なのに、演奏が始まると雰囲気が変わるところがかっこよくて、好きなんだよね。」

「清太は『BLACK LIGHT(ブラックライト)』のことよく知っているんだね。」

「うん。それで、昨日テレビに出たのが嬉しくて、話しちゃったんだよね。そうしたらあいつも同じ番組見てて、ジュンジロウさんが地元おんなじなのは知っていたから、それを言ったらあいつが中谷に似てない？って言いだしてカマかけ始めたんだ。」

「なら、あいつが悪いじゃん。清太は本当に好きなんでしょう？」

「うん。それが、地元がとか言わなきやよかったです。まさか中谷の兄ちゃんなどとは思わなかったしさ。」

「それ、もうばれてるかもしれないけど、みんなには内緒にしておいてほしい。お兄ちゃんのことは尊敬してるから面白半分で触れてほしくないの。」

清太は分かったと言って、結局どうにかうまいこと話してくれたのかそれ以降お兄ちゃんのことを誰かに聞かれることはなかったし、音楽プレイヤーのことを先生に聞かれることはなかった。

もちろん、授業をさぼったことは二人ともしっかりと怒られた。

そんなことはあったけど、清太とは元々はそんなに仲が良かったわけでもなく、それ以来はなすことも特になかった。

中学生になって、初めてスマホを買ってもらった。『BLACK LIGHT(ブラックライト)』の情報を知るためにSNSのアカウントを作った。お兄ちゃんに聞いたら教えてくれるのかもしれないけど、どんどん忙しそうになっていくお兄ちゃんの邪魔をするのも申し訳ないと思った。

そこで、ドラム以外にはまることになるものを見つけた。男性同士の恋愛、いわゆるBLだ。

次のライブの情報を手に入れようと開いたSNSにはいろんなものが流れてきて、そこで目にとまつたのは男の人2人が顔を近づけて顔を赤らめているイラストだった。

その日は見ないふりをした。なんとなく見てはいけない気がして、画面を閉じた。でも、頭からそのイラストが離れなくて、あの時のイラストの顔が何をしていてもちらつく。

見ないようにしていたけど、我慢できなくなり、何日か経ってSNSで調べてみるといろいろなイラストが流れてきた。何という感情か分からぬけど、胸がドキドキしてしかたなかった。

最初は見るだけでも良かったのだけど、自分でイラストを描くことも楽しくなっていった。もともと絵を描くのは得意な方だったので、自分でイラストを作り始めた。

家に帰ったらドラムの練習して、学校にいる間はイラストを描く。題材は好きなアニメから、芸能人、想像したキャラクターのイラストや関係性を自分で作り出して描くのが楽しかった。

でも、それは内緒。大切な物とか好きなものは人に教えない。小学生だった頃にそれは学んだ。

自分にとっては大切な物でも人は簡単に踏みにじる。面白そうな物には食いついて、知ったことについては自分の功績かのように語ろうとする。だから誰にも教えなくてもいい。

それに、ネットでもいろんなことを言っている人がいた。男同士とかあり得ない。そんな言葉も目にした。誰にでも受け入れられる趣味じゃないことは理解していた。

高校は軽音部があると噂の進学校へと進んだ。たぶんそこそこ頭のいい学校のはず。勉強はイラストを描いている片手間に聞いていても授業を聞いていれば理解できた。

しかし、2年前の情報だったらしく、私が入学することにはなくなっていた。

高校生になったらバンド活動をやってみたいと思っていたのでがっかりしたけど、5人集まれば部活を作ることはできるらしい。

一旦もともと軽音楽部が活動していたらしい第二音楽室へと行ってみる。そこにはバンドをやるには十分な設備はあった。ドラムセットもギターもベースもキーボードもそろっている。

2年放置されていたのならメンテナンスされていないのかもと思い、ドラムセットを引きずりだして、スティックを構える。ためしに叩いてみたが問題なさそうだ。今度はヘッドホンをつけて一曲叩いてみることにした。

集中して1曲仕上げて目線をあげると、ドアの所から覗いている一人の生徒がいた。確か同じクラスの男子のはずだ。私は彼の方へと歩いていくと声をかける

「ドラム好きなの？学校にドラムセットあるの珍しいよね。数年前まであった軽音部のなごりらしいよ。」

彼もドラムが好きなのだろうか？そうだとするとバンドにドラムは2人もいらないから争奪戦になるなあとか思いながらスティックを差し出す。ドラム希望なら腕前は見極める必要がある。正直、私は結構上手なはずだけど、彼がもっとうまいのなら最悪ポジションチェンジしないといけないのかもしれない。

「いや、僕は叩けないからいいよ。それよりも、軽音部？」

「うん。バンド活動をする部活。2年前になくなっちゃったらしいけどね。ドラムをただで学校で叩けるのっていいよね。君は何か弾けないの？」

「僕は、ギターを少し弾けるかも。君みたいに特別うまいわけじゃないけど。歌うのも好き。僕は1年生の原山海。君は？」

「中谷夢（なかたに ゆめ）。私も1年生だし、何なら同じクラスだよ。ほら、これギター。セッションしよ。」

原山の希望パートに安堵しながら、ギターを引きずり出して彼に渡す。彼は嫌がるそぶりも見せずに一曲引いて歌ってくれた。ギターはまあそこそこって感じだけど、歌は上手かった。

いいバンドになりそうじゃん。素直にそう思ったから、原山と軽音部を作ることにした。

部員として誰かを誘わないといけない。そう思った時、同じクラスに清太がいることを思い出した。そう言えば、『BLACK LIGHT(ブラックライト)』が好きって言ってたし、ベースが好きだって言ってたから誘えば乗ってくれるかもしれない。

誘ってみれば、中学生になってから親にベースを買ってもらって1人でひいていたらしく、軽音部に入ってくれることになった。

軽音部のポスターを作って掲示板に貼ろうと思ったときに、1人の女子に声をかけられた。それが石山晴夏だった。1年生で新しく部活を作ろうとしていることに興味を持ってくれたらしくピアノを習っていたこともあるらしいのでキーボードをやってくれることになった。

後一人はどうしようかと思っていると、原山が隣のクラスのイケメンを連れてきた。全て未経験らしいけど、正直顔だけで武器になる。練習すれば楽器は弾けるようになるし問題ないだろう。

部活として正式に活動が始まった。

原山は『BLACK LIGHT(ブラックライト)』が好きらしく、練習曲として持ってきた。正直全部弾けるので正直張り合いはない。とはいっても、理由を説明するのが面倒くさくて言えないでいた。

そのせいで、そのせいで気が散り、部活内でカップリングを作つて脳内で妄想し始めた。好きなカップリングは原山×清人。ボーカル＆ギターとベースの裏での関係性を妄想しだすと止められなくなつた。元気な原山とおっとり系の清太。妄想はいくらでも膨らんだ。

しかし、そんなことを言ってられなくなることが起きた。山瀬が作曲をできることが発覚した。聞かせてもらった曲は思ったよりもいい曲で、晴夏が作詞をしてみたいと言い、そこからは自作曲を作つて練習するようになった。

山瀬の作る曲は、ドラムに対してとんでもないアプローチをさせる曲が多かった。こんなリズム叩けるわけないだろって思うような曲もあったけど、できないとは言いたくない。むしろやりがいぐらいに思つて必死に練習し、妄想を膨らませる時間は減つていった。

さらに、最近は晴夏に好きな人ができたらしく、のろけ話を聞かせられる。私自身は特に恋愛に興味がないのでいいアドバイスができるとは思えなかつたが、話を聞くだけでいいみたい。

相手が誰なのかは教えてくれなかつたけど、おそらく山瀬だろう。一緒に作詞作曲をしていれば芽生える者もあるのだろう。いくら難しい曲を当てつけのように作つてくるようなやつでも、晴夏みたいにかわいい女子には優しさを見せるのかもしれない。

どこが好きなのか聞いてみたときに「たまに意地悪だけど、すごく優しいし、かっこいいんだよ。」ってのろける晴夏を見てそう思つた。

しかし、夏休みに入る少し前、私は見つてしまつた。ボーカルの原山と清太が2人で教室で顔を赤らめながら話している姿を……。その光景がせっかく忘れていた自分の悪癖を思い出させた。

私は2人で妄想をすることが止められなくなつて、夏休みに入って少し経つ頃、新しい本を1冊読み出した。しかし、さすがに完成した辺りで自制心は芽生えた。

見つからぬ形で見つかった。だから、持つてこないようにしていたはずなのに、部室でカバンの中に入っていることに気が付いた。私は見つからないようにそつとしまつた。…はずだった。なのに家に帰つたらなくなつた。どこで落としたのか分からぬ。

私は次の日、朝一に学校へと向かつた。まずは教室に向かう。すみずみまで見てみたけど落ちなくて、今度は部室へと向かう。

誰にも見つかってませんように。そう願つていたのに、思いもよらぬ形で見つかった。教室には原山がいて、足元には本だったそれがばらばらの紙になつていていた。

見つからぬ形で見つかったと誰が破つたのだろうか、二つの絶望が頭の中をぐるぐる回り出し、真っ白になつた。

他キャラクターのイメージ

【原山海】

普通にいいやつ。高校でこいつとあっていなかったら軽音部はなかったかもしれない。
でも、部室で浜田とあんな感じで話しているのを見せられてしまったらそう解釈するしかないよ。
この二人なら絶対左側が原山だと思う。

【浜田清太】

小学生の時からの知り合い。高校で一緒に軽音部になるとは思っていなかったけど。
原山といい感じで、まさかの男が好きだとは思っていなかった。清太の場合は総受けだと思って
るので、右側になると思う。

【石山晴夏】

とてもかわいい。私とは違っておしとやかな感じだし、どっちかというとクラシックピアノが似合
いそうなタイプ。恋する乙女で、おそらく相手は山瀬だ。うまくいくといいなとは思って、応援し
ている。

【山瀬浩樹】

愛想はよくないけど、作る曲はいい。ドラムの難易度が高い曲ばかり作ってくるのは、単純に挑戦
のしがいがあるのでうれしい。
ただし、晴夏とどうくっつけていいの変わらないくらいよくわからない男。

以前、ボトルシップに流した内容

【原山と清太の恋模様に気が付いた時の投稿の内容】

見ちゃった……。あんなに顔を赤らめて話してて絶対これはあれだ。
ラブ！！！ラブだよね！？どうしよう止められない。妄想がはかどるっ

【お兄ちゃんには負けたくないと思った投稿の内容】

自分は自分でしかないので、色眼鏡で見てくるの本当にうざい。勝手に比べないでほしい。

【晴夏の恋バナを聞いた後の投稿の内容】

好きになるって気持ちがあんまりよく分からないんだよね。でも、恋してる女の子がかわいいのは分かる。

目標

- ・BL本を破いた犯人を探す。（いったい誰が破ったんだろう？そこまでしなくてもいいのに）
- ・自分がBL本を書いたことがばれない。（バレたらなんて思われるかわからない。）

ボトルシップのID

lsp-bb

ひいてはいけないボトルシップの番号

7 • 1 3 • 1 6